

演題

「キャストパーシャルデンチャーのデザインと適合への探究 アナログとデジタルの臨床的アプローチについて」

中野進也

抄録

昨今、超高齢化社会において義歯の需要が高まっている様を感じる。

患者様に、如何に快適に機能して永続性のある義歯を提供できるかが臨床においての成功の指標であると思割れる。日々の臨床の中で、欠損補綴はアプローチの仕方で患者満足度が、特に大きく異なるように感じる。そこで私自身の院内技工の経験を含めた約24年の歯科技工歴を基に、患者に寄り添う「心の技工学」とラボサイドにおける適合等のキャストパーシャルデンチャーの成功へのアプローチを川島哲先生の提唱する Testu Kwashima method による「美しく・機能するパーシャルデザイン」を中心に提示したい。

また近年、デジタルデンチャーの成長・進化が著しい中においてのデジタル機器である CAD と 3D プリンターを用いて臨床例を交えながら、アプローチと展望も合わせて提示したい。

演題：品質と作業の効率化を両立させる考え方と実践

枝川智之

抄録

近年では、デジタルの進化により CAD/CAM を活用することで、ある程度の工程を効率よく品質を安定させることが出来るようになりました。

しかし、ジルコニアインレーなどは、チッピングを回避するためマージンを厚くすることで不適合になりやすい要素が多くあり、機器の特性を把握して適切に活用する考え方やシステムを構築することが生産性向上になるのではないのでしょうか。

また、審美領域に対しても高透光性ジルコニアによって、変化が起き 0.3~0.6mm 程度のレイヤリングで色調を表現するライトレイヤリングやマイクロレイヤリング、陶材を使用せずに 0.1mm 以下の薄い層で色調を表現するステイン法などが一般的になってきています。特に薄い層で色調を表現するステイン法で、深みや立体感のある表現をするには、色調の知識のみではなく光の特性や材料学などの知識を持ち合わせる事が重要となります。このように共通の認識を持つことで誰が行っても一定のクオリティが保てるようにシステム化を実現し、会社全体の「作業の効率化」と「品質の安定」に繋がり、考え方次第で結果を大きく変えることが出来ます。そして今の時代はこの「思考」を柔軟に捉えて変化することを求められるのではないかと感じています。今回の講演ではデジタル・技術・経営・教育の分野を通して成果を変えるための「思考の習慣」を共に考え、将来の vision を見据える機会になればと思っています。